

# 小津久足 『陸奥日記』 刊行にあたって

佐藤 大介

この本は、江戸時代後期の商人で、旺盛な文芸活動を行なった小津久足（文化元年（一八〇四）～安政五年（一八五八））の手による紀行文『陸奥日記』の全文を翻刻した史料集である。

小津久足は、伊勢・松坂（三重県松阪市）を本拠とし、江戸・深川（東京都江東区）を拠点に海産物商を展開した豪商・湯浅屋与右衛門家の主人であった。映画監督・故小津安二郎の先祖筋にもあたる。

久足は、滝沢馬琴の友人として知られる一方、近年の江戸文学研究では、七万首におよぶ和歌と四六編の紀行文などを残した彼自身の文芸活動、人物に迫る研究がなされている。久足自身の意志により、生前に彼の作品が出版されることは無かったが、その客観的かつ批評に富んだ筆致は、江戸時代の紀行文学の到達点と評価されている。その紀行文の中でも代表作とされるのが『陸奥日記』である。

天保十一年二月二十七日（西暦一八四〇年三月三日）以下カッコ内は西暦での月

日を示す)、小津は干鰯商を営んでいた江戸・深川(東京都江東区)を出発、下総(千葉県)、常陸(茨城県)、浜街道(福島県および宮城県沿岸)を経て、三月十四日(四月十六日)に松島(宮城県松島町)に至った。帰路は奥州街道(宮城県、福島県)を南下し、下野(栃木県)をへて、三月二十七日(四月二十九日)深川に戻った。目的地である松島はもちろん、途中の史跡や風景、出会った人々への詳細な描写と、久足の独自の視点による論評が加えられている。文学者、商人、また旅行者としての久足について、また『陸奥日記』の江戸時代紀行文の中で位置づけについては、この後の総論および論説の文章を参照していただきたい。

また、今回の出版は、二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災が契機になっている。久足が『陸奥日記』でたどった旅路の多くは、地震、津波、そして原発事故の被災地となった。

私は、宮城県域を中心に、被災した地域に残された古文書その他の歴史文化遺産のレスキュー活動に従事している。約一〇万点の被災史料を救出する一方、津波で一瞬にして失われ、救出できなかったものも数知れない。一度失われた史料は、二度と取り戻すことが出来ないものである。

さらに、今なお続く「復興」過程の中で、大規模な土木工事、集落の移転、区画整理などにもない、久足が通った地域の集落、地名、道筋、山河、海岸の風景は激変しつつある。被災地では、過去数百年にわたってその地で受け継がれてきた歴

史文化を、またそこに人々の暮らしが積み重ねられた「ふるさと」があったという証を、一挙に失う危機に直面している。

私は、歴史学、人文学研究に取り組む立場として、被災した地域を単に「災害が起こった場所」とさせず、人々の歴史的なあゆみに裏付けられた暮らしがあったことを伝え、将来にわたってそのことを知るための手がかりを残すことを、専門性を活かした災害支援の一つだと考えている。暮らしの痕跡をほとんど失った津波被災地や、私の故郷・福島の、フレコンバッグに埋もれた町を訪れる中で、その思いはより強くなった。失われた手がかりを取り戻すには、何をすべきなのか。その一つは、被災した地域の外に残る史料を集めることであろう。そのような中で、江戸時代の旅行史、観光史の立場から『陸奥日記』を分析した青柳周一、高橋陽一両氏の研究を通じて、その存在を知る事となった。本文が未活字化ということであれば、それを公刊すること自体に意義がある。さらに、小津久足による描写の特徴ゆえに、ここには被災した各地の、過ぎ去った歴史を知るための貴重な内容を含んでいると考えたからである。青柳、高橋両氏に、以上のことを説明し、分担して解読を行いたいと提案したのは、二〇一五年十二月のことであった。

両氏からは快諾を得る一方、青柳氏から、江戸文学者の菱岡憲司氏が小津久足の未刊紀行文についても出版を進めている、との教示があった。『陸奥日記』についても出版される可能性があるとのことであったので、青柳氏から菱岡氏に照会したところ、「陸奥」に関する作品を、被災した東北の地から発信する意義を指摘され、

全文の解読原稿を快く私たちに提供されたのである。本書の刊行は、この「一二万字の被災地支援」無くしてはありえなかったことを明記しておきたい。

菱岡氏からは合わせて、『陸奥日記』を歴史学の視点から検討することの意義について示唆を受けた。久足がたどった各地の史跡、伝承、当時の社会状況の調査には、その経路に当たるそれぞれの地域に根ざした調査研究が必須である。そこで、千葉、茨城、福島、宮城、栃木の研究者に呼びかけ、二〇一六年から「陸奥日記研究会」を立ち上げている。「三・一一」被災各地での史料レスキューなど、歴史学、人文学の立場からの地域連携、被災地支援に積極的に取り組む仲間である。目下、久足の陸奥への旅路について、文学・歴史学の観点から学際研究を進めているが、本書はその最初の成果でもある。研究会の呼びかけ人である菱岡、青柳、高橋の三氏に加え、江戸紀行文学研究の第一人者である板坂耀子氏からも寄稿を受けた。記して感謝したい。

『陸奥日記』が、江戸文学や江戸時代の文化史、経路となった各地の地域史研究で活用されることはもちろん、「三・一一」により被災した地域に暮らす方々や、そこに思いを寄せる方々にとって、それぞれのふるさとを知るためのよすがとなれば幸いである。